

## 2. 地域の概要

---

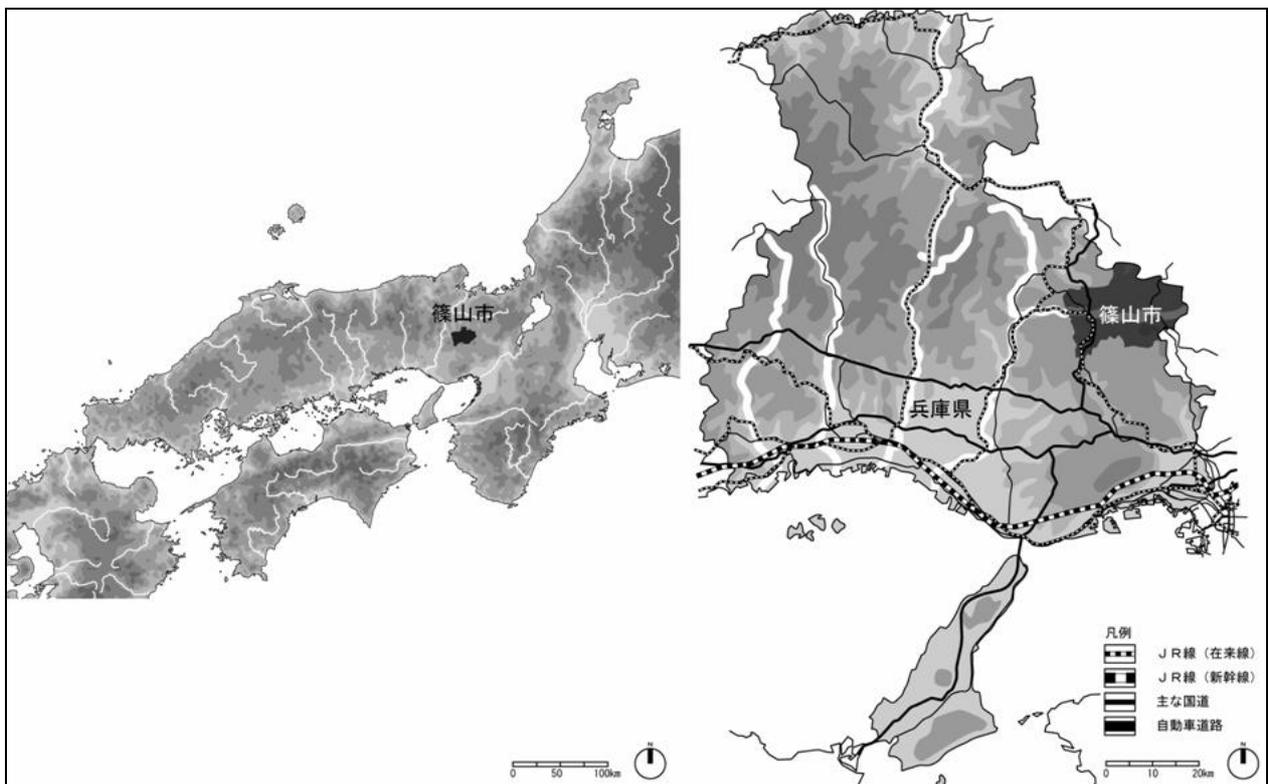
## 2.1 自然と社会

篠山市は兵庫県の中東部に位置し、京都府境に接する標高約 200m の篠山盆地を有する。この盆地は東西およそ 12km、南北 4km をはかる典型的な内陸盆地である。周囲は山々でほぼ囲まれながら、盆地としては平坦で、その中に点々として小山がある。盆地の中央を東から西へと流れる篠山川は下流で加古川に合流して瀬戸内海へ注いでいる。この篠山川は勾配が緩やかで、通常は流れも穏やかだが、大雨等による氾濫を繰り返して流れを変え、肥沃な土地を形成してきた。

盆地の大部分は、弥生時代以来水田として耕作され、この地方の穀倉地帯であった。だが、内陸的気候により、冬の寒さが厳しいため裏作に適さず、他地方で一般的であった麦作がほとんど行われなかった。そのために近世以降は冬の農閑期に出稼ぎに行く人々が多く、特に灘などの酒造の労働力となり、丹波社氏として名をはせている。

篠山市の中心は、篠山盆地のほぼ中央で、篠山川の北側に築かれた篠山城の周辺に発達した城下町である。この地は古くから交通の要路で、京都府の園部から兵庫県の柏原や佐治へ通じる道筋であり、江戸時代から明治初頭にかけて大いに発達し、多紀郡内きっての近世都市となった。

近年、篠山市は昭和 30 年（1955）、昭和 50 年（1975）、平成 11 年（1999）の 3 度にわたり周辺町村との合併により行政単位としての規模は拡大し、面積は 377.61k m<sup>2</sup> である。人口規模としては増加したものの、就業先の不足から若年労働者の京阪神都市圏への流出等を招いている。ただ、こうした反面、比較的開発の波を受けなかったため、豊かな自然環境や特色ある歴史・文化環境が良く保持されており、かつての城下町の雰囲気は今に伝えている。



篠山市位置図

## 2.2 人口世帯状況

### 2.2.1 篠山市の人口世帯状況

人口は戦後大きく減少を続けてきたが、昭和 60 年（1985）の国勢調査から増加に転じた。

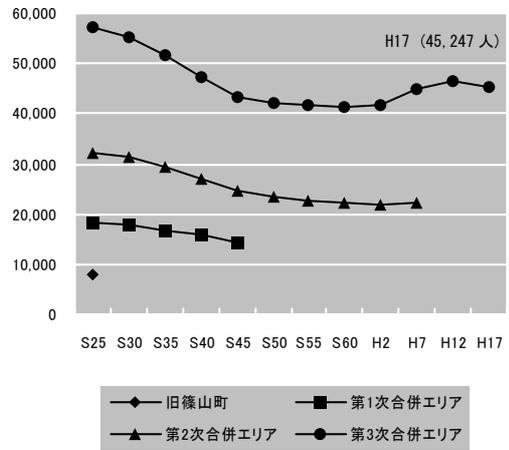
これは JR 福知山線の複線化による通勤圏の拡大や大規模宅地開発、篠山口駅西側における土地区画整理事業の施工等を背景とし、約 10 年間は一定の増加傾向を示していた。しかし平成 17 年（2005）の国勢調査では再び減少に転じている。

また小学校別では、市域周辺の山間部及び伝建地区を含む篠山小学校区で継続した人口の減少が見られる。

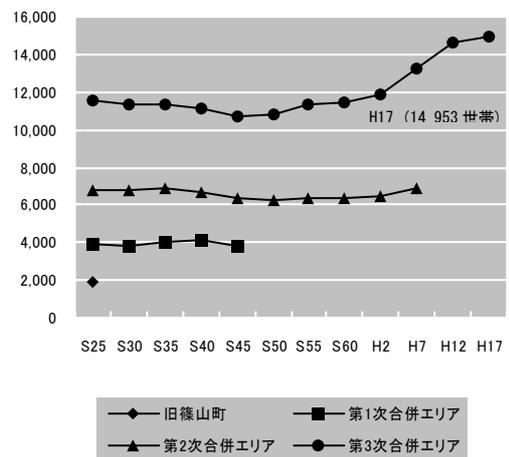
世帯数においても戦後緩やかに減少を続けてきたが、昭和 45 年（1970）の国勢調査以降は増加に転じており、人口と同様に昭和 60 年（1985）から平成 12 年（2000）の 10 年間は大きく増加しており、平成 17 年（2005）の国勢調査でも緩やかな増加を見せた。

続いて、平成 17 年（2005）の 5 歳階級別人口推移を見ると、人口のピークは 55～59 歳、続いて 70～74 歳にあることから、今後とも高齢化が進行していくと考えられる。

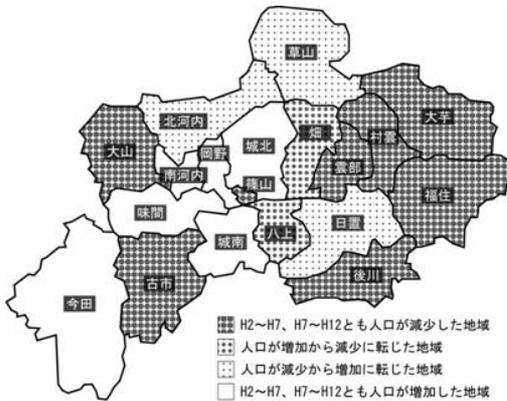
また小学校別では、市域周辺の山間部及び伝建地区を含む篠山小学校区で高齢化比率が高くなっている。



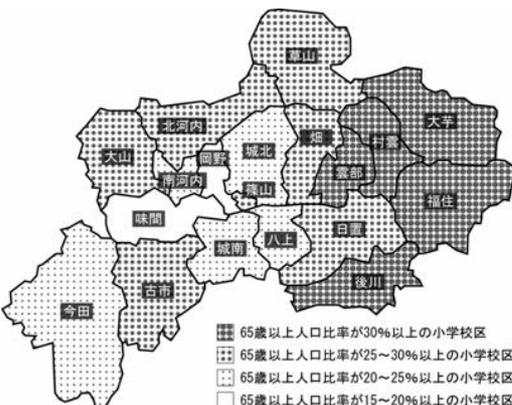
人口の推移 (参考：国勢調査)



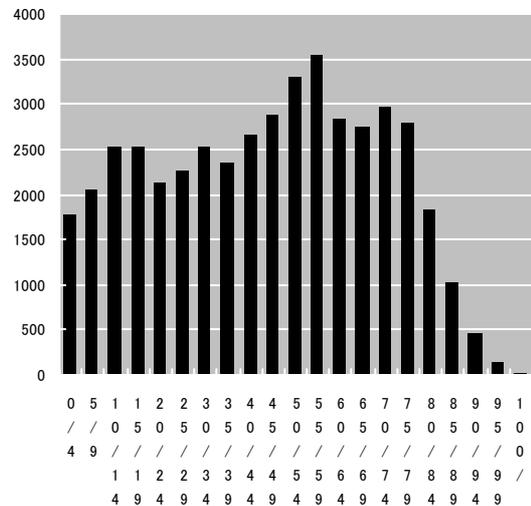
世帯数の推移 (参考：国勢調査)



小学校別人口推移 (参考：市資料)



小学校別高齢者人口比率 (参考：市資料)



年齢階級別人口 (参考：平成 17 年国勢調査)

## 2.2.2 伝建地区の人口世帯状況

伝建地区が所在する6町では、平成19年(2007)において、人口が1,974人、世帯が819世帯となっている(※地区外居住者を含む)。これは昭和45年(1970)当時と比較すると人口で3割程度減少しており、世帯数は若干増加している。

町ごとに見ると、かつての商家町(小川町、下河原町、上河原町)の人口と世帯数の減少が大きいことがわかる。上河原町や下河原町においては市営住宅が建設され、一定数の人口、世帯増があったものの、減少傾向は止まっていない。

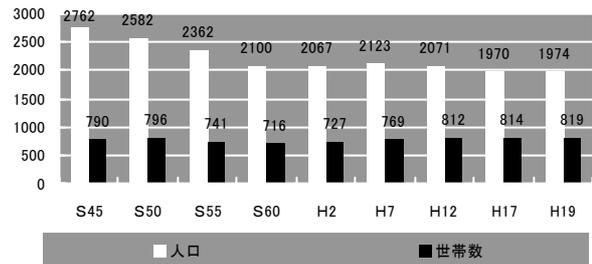
一方、武家町(西新町、南新町、東新町)では商家町ほどの減少は見られず、世帯数については増加の傾向にある。これはアパートや戸建住宅が建てられたことによるもので、それも武家地から離れた縁辺部での開発によるものである。

いずれにせよ、城下町地区全体が人口・世帯とも減少し、かつ旧来の町中ではそれらの減少が着実に進行していることが明らかである。

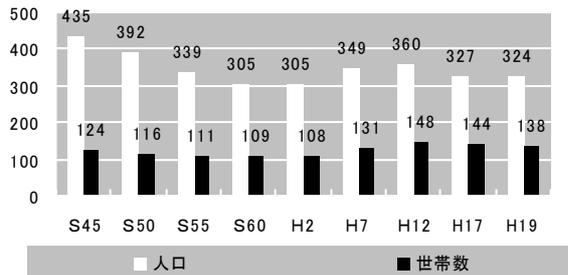
		S45	S50	S55	S60	H2	H7	H12	H17	H19
西新町	人口	435	392	339	305	305	349	360	327	324
	世帯	124	116	111	109	108	131	148	144	138
南新町	人口	621	563	517	455	444	492	479	465	470
	世帯	167	178	173	169	172	181	191	203	211
東新町	人口	639	634	557	518	515	497	510	512	531
	世帯	200	206	186	183	181	182	194	204	210
小川町	人口	92	92	78	74	71	60	53	45	46
	世帯	27	27	23	24	25	22	19	19	19
下河原町	人口	474	432	433	364	358	370	347	296	286
	世帯	142	138	128	116	116	126	123	113	111
上河原町	人口	501	469	438	384	374	355	322	325	317
	世帯	130	131	120	115	125	127	137	131	130
6町合計	人口	2762	2582	2362	2100	2067	2123	2071	1970	1974
	世帯	790	796	741	716	727	769	812	814	819
小学校区合計	人口	6366	5825	5198	4655	4449	4440	4254	3943	3896
	世帯	1771	1775	1627	1575	1557	1610	1653	1615	1615

伝建地区が所在する6町の人口世帯推移(参考:市資料)

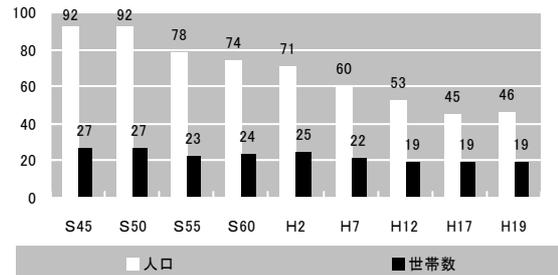
※この頁のデータは全て地区外居住者を含む



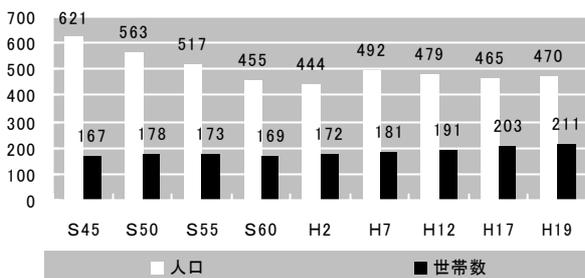
伝建地区が所在する6町の人口世帯推移(参考:市資料)



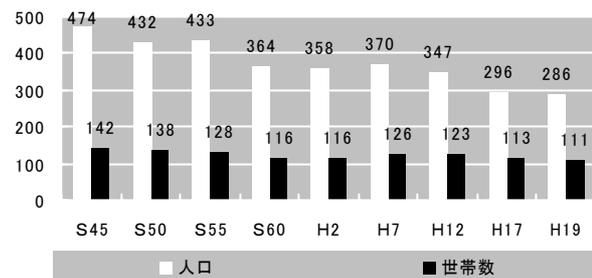
西新町の人口世帯推移(参考:市資料)



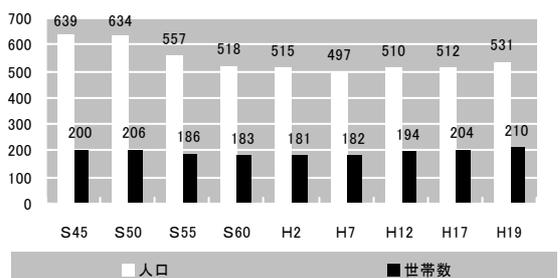
小川町の人口世帯推移(参考:市資料)



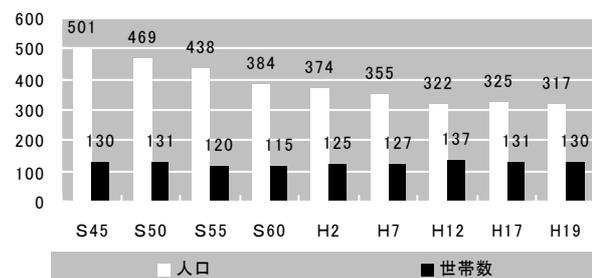
南新町の人口世帯推移(参考:市資料)



下河原町の人口世帯推移(参考:市資料)



東新町の人口世帯推移(参考:市資料)



上河原町の人口世帯推移(参考:市資料)

## 2.3 自然条件の特性

### 2.3.1 地形

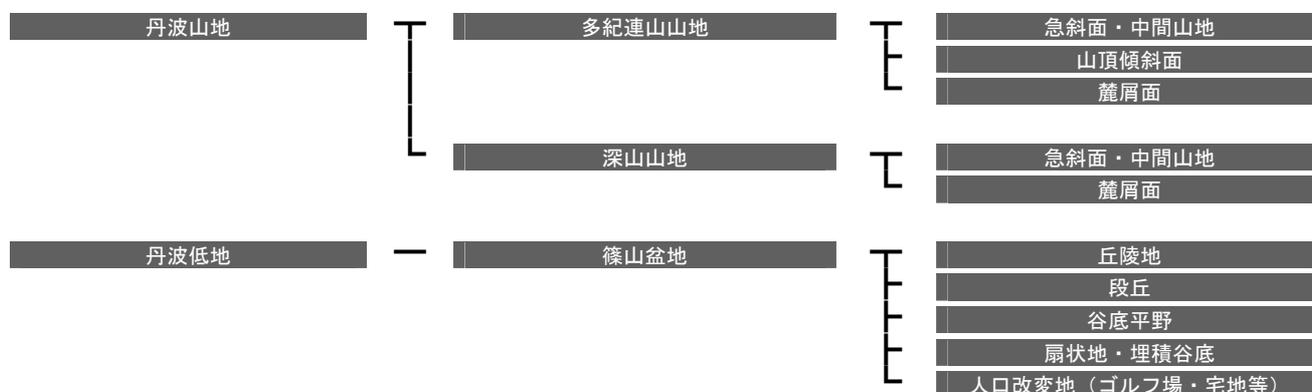
#### 1) 河川

市内の河川は加古川水系、由良川水系であり、篠山川はその加古川水系の一大支流である。また、北部は由良川水系、南部は武庫川水系となり、流域に谷底平野を発達させている。

さらに、篠山市には県営事業により造成された農業用ダムが5箇所（藤岡ダム、鰐市ダム、八幡谷ダム、佐仲ダム、黒石ダム）あり、農地の灌がい用水源として大切な役割を果たしている。

#### 2) 地形

篠山市の地形は、大きくは丹波山地（高地）と丹波低地（篠山盆地）の2つに分けられる。丹波山地は主要な断層線や起伏等から大小いくつかの地塊（断層）山地に分けられ、丹波低地は丘陵地や段丘面、谷底平野等に区分できる。



篠山市の主な地形

#### 多紀連山山地：

篠山市の北縁には、丹波市柏原町向山から約 30 kmにわたる標高 600～800m級の山々が線状に続き、多紀アルプスとも呼ばれている。

#### 深山山地：

深山山地は篠山市の南側に連なる山地で、標高 300～800m級の山々となっている。とくに東部では 700m以上の山々がそびえ、その北側斜面は白髪岳断層崖と称される急斜面となり、ほぼ直線上に東西に連なっている。

#### 麓斜面：

麓斜面とは、山地斜面の下方に発達している主として岩屑の堆積物より成る緩斜面で、篠山市にはこの分布が著しく、全域にわたって散在している。

#### 篠山盆地：

篠山盆地は北側を多紀連山山地、南側を深山山地に囲まれた東西に長くのびる盆地であり、その中を篠山川が西流している。盆地の大きさは、東西約 12 km、南北約 4 kmである。

盆地底には、篠山層群よりなる小丘陵が散在している。また、盆地底は地形的には、西方では段丘化しているが、東部では篠山川の沖積地となっている。高度は 200～230m ぐらいである。

西部では低位段丘が広く発達し、その背後には扇状地が、そしてさらにその背後には麓斜面が見られる。東部は篠山川と舂井川の谷底平野が続き、その周辺には丘陵地や扇状地、麓斜面がみられる。また、一部には低位段丘がみられる。

## 2.3.2 地質

篠山市の地質を地史上の古い順に見ていくと、次のとおりとなる。

### ジュラ紀以前：

篠山市の山地の大部分及び丘陵地の一部は、丹波層群及び新荘層と称される堅固な古成層（3億年前）を基盤としている。

### 白亜紀：

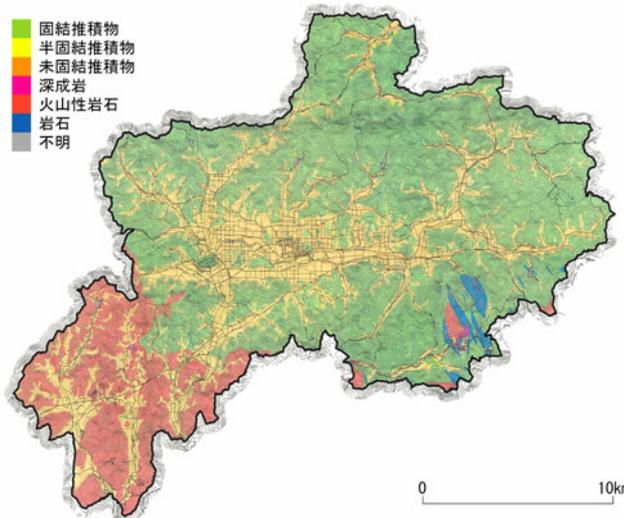
篠山盆地の平地に散在する島状の多くの丘陵と盆地周縁部の丘陵は、中生代白亜紀の篠山層群から成り、風化が進んでいる。また、三田市や猪名川町との境界部分の山地の一部は、中生代白亜紀の有馬層群のⅠ累層である火山性岩石から成る。

### 洪積世：

中礫を主とする角礫層と砂・粘土の互層から成る後川累層と称される半固結堆積物などで、市全域に散在する麓斜面や扇状地・埋積谷底などに見られる。

### 沖積世：

礫・砂及び泥から成る沖積層は、篠山川、初井川、羽束川などの流域に分布し、谷底平野を形成している。また、中礫、大礫、巨礫などで構成される低位段丘堆積物は、篠山川をはじめ諸河川沿いに現平野より高い面を発達させ、篠山市の市街地や集落が形成されている。



表層地質図

出典：平成14年度篠山市土地利用調整基本計画策定事業委託業務報告書

地質時代	地質内容	主な岩体・地層
沖積世（新生代・第四紀・完新世）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 礫・砂及び泥（未固結堆積物）</li> <li>・ 礫及び砂（未固結堆積物）</li> </ul>	沖積層 崖錐及び扇状地堆積物 低位段丘堆積物
洪積世（新生代・第四紀・更新世～完新世）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 礫・砂及び泥（半固結堆積物）</li> </ul>	後川累層
白亜紀（中生代）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 単斜輝石含有角閃石安山岩、火砕岩（固結堆積物）</li> <li>・ 泥岩・砂岩及び礫岩</li> <li>・ 黒雲母流紋岩、凝灰角礫岩及び火山礫凝灰岩（火山性岩石）</li> <li>・ 流紋岩溶結凝灰岩（火山性岩石）</li> <li>・ 細粒閃緑岩、トーナル岩及び花崗閃緑岩（深成岩）</li> <li>・ 珩長岩・アプライト及び文象斑岩</li> <li>・ 流紋岩</li> <li>・ かんらん石単斜輝石、斜方輝石安山岩（岩脈）</li> <li>・ 花崗班岩</li> <li>・ 安山岩など</li> </ul>	篠山層群 有馬層群
ジュラ紀以前（中生代～古生代）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 頁岩及び泥質混在岩</li> <li>・ 層状チャート・珩質頁岩をはさむ</li> <li>・ 頁岩及び泥質混在岩</li> <li>・ 砂岩及び砂岩泥岩互層（固結堆積物）</li> <li>・ 酸性凝灰岩（固結堆積物）</li> <li>・ 塩基性溶岩～輝緑凝灰岩</li> <li>・ 緑色岩類</li> <li>・ 頁岩及び石質ワッケ</li> </ul>	丹波層群 丹波帯 新荘層 超丹波帯

篠山市の地質

### 2.3.3 気象条件

篠山市は四方を山に囲まれた盆地であるため、冬期は日本海から寒波の影響も加わり、寒気は比較的にきびしく、夏期は概して内陸的気候といえる。昼夜の温度差は大きい。

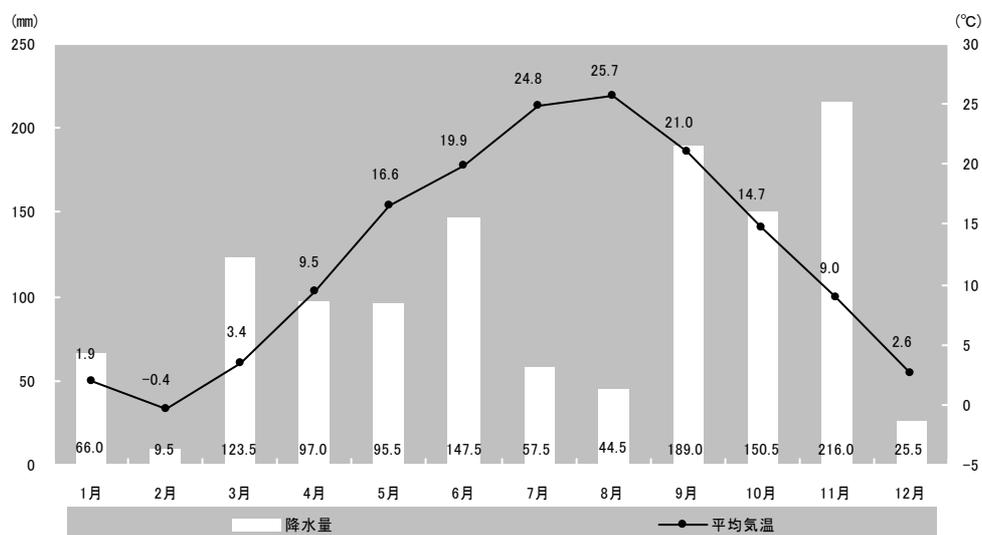
年間降水量はおよそ 1,400～1,500 mm で、6月～9月に多いいわば梅雨・台風型の降水パターンとなっている。冬期の降水量はかなり少なく、乾燥した冬である。

また、降雪量は近年少なくなっているが、山間地の後川では平成7年(1995)の観測値で12月27日に最大値70cmを記録し、時に大雪もみられる。同じく後川の平成7年(1995)の観測記録によると、1月～3月及び12月の4ヵ月間で、積雪日数は29日間みられるが、そのうち10cm未満が19日と半数を上回る。

この他の気象的特徴としては、秋から冬にかけて霧が多く発生し、50m先が見えない濃霧の時もしばしばあるほど霧が深いことで有名である。とくに篠山川の近くは濃霧が発生しやすい。

台風による大雨は、8月から9月にかけての本州に接近又は上陸することによるものが著しく、とくに台風が中心が篠山市の東側を通過する場合には、総雨量150mm以上のまとまった雨となる。その一般的なコースは、紀伊半島付近に上陸した後北東に進む台風である。

台風以外の大雨は、秋雨前線・梅雨前線あるいは低気圧によるものとなっている。また、大気が不安定な時に起こる雷雨も、総雨量は少ないものの短時間に集中して降る場合がある。



降水量と平均気温

## 2.3.4 地盤条件

篠山市の地盤条件は、次の5種類に区分される。

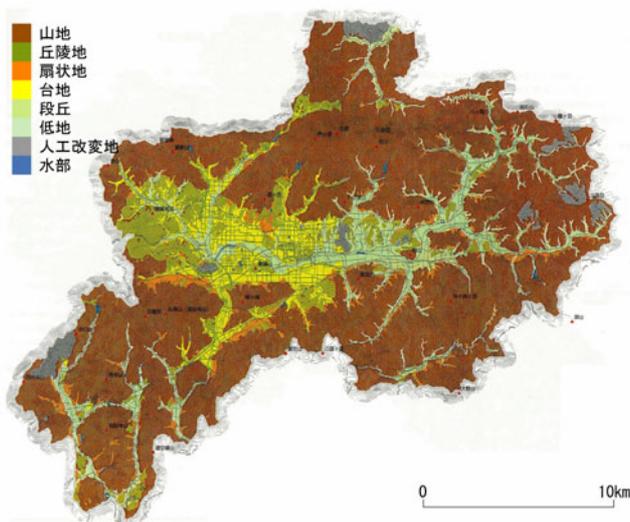
地盤のランク		地形条件	地質条件
A	第1種 良い	山地（多紀連山山地、深山山地）	ジュラ紀以前～白亜紀の丹波層群・篠山層群
B	第2種 やや良い	丘陵地・段丘	洪積世の後川累層など
C	第3種 普通	扇状地・埋積谷底、麓斜面	沖積世の崖錐及び扇状地堆積物など
D1	第3種 やや悪い	谷底平野などの低地の一般面	砂質沖積層
D2	第4種 悪い	人工改変地	盛土

篠山市の地盤区分基準

注1) 地盤区分は、建築基準法に基づく建設省告示第1074号（昭和27年）に準じる。

注2) 人工改変地では、高い盛土地、埋土地、干拓地が一般的に危険である。なお、人工改変地は工法によって地盤の良否は異なる。

「A」及び「B」ランク	山地や丘陵地・段丘等に相当する地盤で、比較的硬質な地盤条件である。「A」ランクの地盤は森林としての利用がほとんどであるが、「B」ランクの地盤には中心市街地や主要な集落が集積している。
「C」ランク	面積的には小規模で、土地利用としては一部工場や集落などの集積もみられるが、森林が多い。
「D1」及び「D2」ランク	低地や人工改変地（盛土部分）に相当する地盤で、比較的軟弱な地盤条件である。河川沿いに市街地や集落の集積もみられ、主要な人工改変地としては、ゴルフ場を除くと宅地、学校、工業団地などである。一般に、比較的強い地震動が生じ、建築物や土木構造物に対する被害も大きくなることが予想される。また、これらの地盤区分においては、未固結の地盤を形成することから、地盤の液状化の可能性もある。



地形分類図

出典：平成14年度篠山市土地利用調整基本計画策定事業委託業務報告書

## 2.3.5 災害履歴

### 1) 火災・風水害履歴一覧

城下町地区において発生した火災被害や風水害について、「篠山藩（青山家）史料」「多紀郷土史考」「篠山町百年史」等をもとに、その概況をまとめた。

年代	西暦	出典	事歴
宝暦 4年	1754	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	三月五日・(中略) 門長屋焼失
明和 元年	1764	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	一〇月一六日・御先手組 棟数六拾六軒焼失
安永 7年	1778	多紀郷土史考 322 頁	魚屋町 (中略) 出火
安永 7年	1778	多紀郷土史考 322 頁	下河原町 (中略) 出火
安永 9年	1780	多紀郷土史考 322 頁	牢屋小路に出火あり
天明 4年	1784	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	六月一八日・南堀端 (中略) 類焼家数一四軒 御長屋式棟 同刻・魚ノ店出火 同 町屋八軒
天明 6年	1786	多紀郷土史考 354 頁	上河原町 (中略) 出火
天明 6年	1786	多紀郷土史考 354 頁	一二月・二階町 (中略) 火災
天明 7年	1787	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	三月四日・(中略) 類焼無之
天明 7年	1787	多紀郷土史考 323 頁	下立町 (中略) 出火
寛政 11年	1799	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	六月朔日・東堀端南角 (中略) 類焼 家数拾貳軒、焼死馬壹疋 御長屋六棟
文化 4年	1807	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	二月一八日・大火 (附ケ火) 東堀端 (中略) 類焼 御家中四拾九軒、町屋百貳拾九軒 貸屋貳拾六軒、御作事 一ヶ所 御長屋 七棟、牢屋 一ヶ所 町寺 貳ヶ所、在寺 一ヶ所
文化 4年	1807	多紀郷土史考 354 頁	文化四年二月一八日は朝から烈しい風が吹いていた。篠山城東堀端の (中略) から出火した。見る見る間に南角の中間長屋を一なめにして火は餌差し町に移り、(中略)の宅を焼いてその火先は北に向かい、御作事場から宝寿院、観音堂から天神社を焼き払い、更に東南に転じて上立町の吉田屋小路から町の両側を焼きつつ牢屋小路を焼き、下立町一円を火の海と化して尊宝寺も来迎寺も焼き払って呉服町に移った。呉服町は四五軒焼いただけで留まったが、黒岡方面に飛火して又忽ち火の手が挙がった。季節風であるから日没頃になると風も納まり、火事も自然に消えてしまった。尊宝寺の山門のみが類焼を免れた。
文化 4年	1807	清涼山来迎寺縁起	二月一八日篠山大火の際記録建物悉く消失す。
文化 10年	1813	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	正月二五日・南堀端東より式軒目 (中略) 類焼 家数拾壹軒 御長屋八棟
文政 3年	1820	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	七月一三日・東堀端南より六軒目 (中略)
天保 年間	1830	篠山町七五年史 5 頁	御徒士町 (西新町) は、天保元 (?) 年不慮の大火に逢い西側を焼き尽くしたが、藩主はこれが復旧に当たり六尺後退して再建せしめた。
天保 2年	1831	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	一〇月二七日・東堀端北より三軒目 (中略) 類焼 五軒 (中略)
天保 6年	1835	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	三月二六日・御城内 (中略) 同式軒 (中略)
天保 7年	1836	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	正月一三日・石山口木戸口番明小屋 類焼 家数六十七軒 西堀端半分ばかり 御長屋六棟、御徒士町
天保 7年	1836	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	一〇月二五日・石山口北側西角 石山口 (中略) 類焼三軒 (中略)
天保 15年	1844	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	九月二日・上西町東側角 (中略) 失火
嘉永 5年	1852	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	二月一〇日・御先手組 (中略) 小屋三軒焼失 御帳者有之、御届ハ無之
嘉永 5年	1852	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	五月一二日・割合町南側之東角 御作事並同処統御長屋不残
安政 元年	1854	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	七月二〇日・西堀端北より長屋共五軒目 (中略) 類焼三軒 (中略) 雷火 (中略)
安政 3年	1856	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	三月二〇日・東堀端南角 (中略) 類焼 御家中屋敷六十三軒 大火 御長屋 九棟 町屋八十一軒 牢屋不残 御作○壹ヶ所 宝寿院不残 但東堀端、餌差 町、小川町、割場町、川ノ町瓦師、堅町
安政 3年	1856	多紀郷土史考 388 頁	三月二六日・正午を過ぎた頃に火の手が挙がった。東堀端と南堀端との角に当たる (中略) 屋敷からであった。この時は南風が烈しく、火は見る見る内に北隣の (中略) 方に燃え移り、なおそれから (中略) と一面に火の海と化した。この時代は家臣の家は茅葺ばかりであるから少しの風でも加われば、造作なく火は回っていく。なお東裏の餌差町へも広がり、(中略) を焼き払い、更に餌差町西側に当たる (中略) 等を一なめにして、火先は割場に向かい、(中略) を焼き払い、果てには宝寿院をも灰燼とした。過ぐる文化の大火事と同様に火先は下立町に向かうものとして人心は恐ろしく、如何ともする術がない。所がこの頃に至って風向きが変わって来た。今までは南風にあおられていたのが西風が変わって来た為に、火先は牢屋小路を限りとしてその南、即ち上立町の中程から南へ向かい、火勢は益々強く、一気に下河原町に燃え広がり、観音寺も共に鳥有となし、その東でようやく火勢が衰え始めた。これが即ち「水沢焼」という大火事である。この火事

			では挿話がある。東堀端と餌差町との中間には通路がなかったのでお互いに町の中間から行くとすれば、南は小川先に廻る要があり、北は又東馬出しの御門を通過して田代邸から本郷邸へ廻っていくのである。普通時はこれでもよいが、一朝非常時ともなれば、不便この上なしということになる。水沢焼にはこの不便をしみじみ味わったので、復興の時にはこの中間に小路をつけることになり現今の黒住教会の横手の道を開いた。細い小路ではあったがこれが「蛤小路」と名付けられた。それは「水沢焼」の後に出来た小路で、即ち焼けて開いたという所から蛤の名をとったという。
万延 元年	1860	篠山御家人屋敷失火之年月 藩日記援萃=非常例集収載	四月二日・追手 (中略) 類焼 (中略) 外二箱番所壺ヶ所
明治23年	1890	多紀郷土史考下 157 頁	9月4日・二味町焼(二枚町:河原町の上を二味町という。この町の北上に東山墓地というのがあり。この墓地を昔は三味と唱えていたので三味の下町で二味というのが元らしい。)が起こる。京口の東側の(中略)から火を出し折からの風速に伴って火は忽ちの内に燃え広がり、京口から東二味町全体をなめ尽くしてしまった。家数にして40軒余一面の火の海と化したのである。然し東にはこれに続く家がなかったので先ず一応はこれだけで鎮火してしまったのであるが、これも相当の大火であった。水沢焼やこの二味町焼に驚いた河原町附近の人々は早速愛宕大権現を勧請して祭祀する事にした。
明治40年	1907	篠山町百年史	8月24、26日 台風被害により京口橋北半分落ちる
大正10年	1921	篠山町百年史	9月25、26日 台風被害により京口橋、監物橋、その他上流の橋梁多数流出す。福知山線、篠山軽便鉄道不通となる。歩兵四個中隊防水救援に出動す。筏見て山崩れあり1名落命す。県守の金比羅神社倒れる。浸水家屋数知れず、電灯も消える。河川、道路、田畑の被害甚大。
大正15年	1925	篠山町百年史	12月23、24日 古老の話で数10年来の大雪、町の中でも尺余の雪となった。またこの直後の寒波が特に厳しく、零下10度前後の日が1週間も続いた。
昭和5年	1930	篠山町百年史	8月1日 豪雨、京口橋がまたも流れ、監物橋は中央部の橋脚が陥没する。被害は郡東部地域にひどく、篠山市街地の約150戸をはじめ、上流の約300戸、計500戸にのぼった。
昭和7年	1932	篠山町百年史	7月1、2日 豪雨、明治40年来の豪雨といわれた。郡内で5名の溺死者を出し、橋梁の流出無数、崩壊家屋四戸、浸水家屋も床上100戸以上、床下1~200戸に達し、交通は全く途絶し、郡内全く濁水の海と化した。
昭和20年	1945	篠山町百年史	1月6日夜、不慮の失火から大書院焼失
昭和20年	1945	篠山町百年史	10月8~10日、阿久根台風、総雨量=篠山 332mm
昭和25年	1950	篠山町百年史	3月14日、篠山小学校東館 330㎡焼失
昭和25年	1950	篠山町百年史	9月3日、ジェーン台風
昭和28年	1953	篠山町百年史	13号台風、郡内の被害は家屋の全壊半壊120戸、床上浸水700戸、床下浸水3700戸という未曾有の大災害をうけ、交通機関も福知山線をはじめ、篠山線、バス路線すべて止まった。電気も電話も途絶。耕地や農作物の被害甚大であった。なお当時の篠山町は「災害救助法」の適用を受けた。
昭和34年	1959	篠山町百年史	9月26日 伊勢湾台風、郡内で2名が落命、家屋の全半壊36戸、床上浸水1053戸、床下浸水3029戸、交通機関も全く不通となった。当時の篠山町、城東町が災害救助法の適用を受けた。
昭和35年	1960	篠山町百年史	8月29日、16号台風、総雨量=三田 249mm 27.5m/s
昭和37年	1962	篠山町百年史	6月8~11日、記録的な豪雨、総雨量=福住 182mm
昭和40年	1965	篠山町百年史	9月10、17日、23号、24号台風、続けて台風の来襲により郡内に多大の被害があった。殊に風強烈で、家屋の全半壊150戸に達し、篠山城跡の檜の巨木4本が根こそぎ倒れた。
昭和45年	1970	篠山町百年史	4月8日、東新町にあった映画館楽天座 726㎡が全焼
昭和47年	1972	篠山市地域防災計画	6月7、8日、篠山町で小学校児童が濁流に吞まれて溺死。総雨量=篠山 101mm
昭和47年	1972	篠山市地域防災計画	9月16、17日、20号台風、郡東部地域の被害が特に大きかった。水死1人。強風のため東岡屋でバス転落。郡内で道路決壊82箇所、橋梁41箇所、河川護岸崩壊400箇所、住宅の半壊3戸、床上浸水42戸、床下浸水1085戸。郡の交通はマヒ状態。総雨量=西紀 190mm 32.1m/s
昭和49年	1974	篠山市地域防災計画	9月8、9日、台風及び前線による大雨。総雨量=篠山 158mm
昭和49年	1974	兵庫の町並	御徒土町通で茅葺旧武家屋敷3棟が全焼
昭和51年	1975	篠山市地域防災計画	9月8~13日、台風17号及び前線による大雨。総雨量=三田 248.5mm
昭和58年	1983	篠山市地域防災計画	9月24~29日、台風10号。全壊2棟、床上浸水135戸、床下浸水765戸。藤岡地区の山崩れにより家屋1戸一部損壊。耕地の流出、埋没、公共土木、農業土木、農作物の被害甚大。総雨量=羽束川 238mm
平成8年	1996	篠山市地域防災計画	8月28日、重軽傷者3名、家屋全半壊14棟、床上浸水15戸、床下浸水323戸。がけ崩れ16カ所、道路32カ所、河川176カ所、農地冠水75.1ha。総雨量=篠山 195.5mm
平成12年	2000	篠山市地域防災計画	11月2日、連続雨量200mm、最大時間雨量34mm 住家被害:床下浸水10件、非住家被害:浸水4件。河川、道路、農地、山林等の被害は、あわせて92件、被害額173,491千円
平成16年	2004	篠山市地域防災計画	8月30~31日、最大瞬間風速33.5m/s、累加雨量56.6mm。倒木が相次ぐ。農作物に被害発生
平成16年	2004	篠山市地域防災計画	9月7日、重傷者1名、軽傷者3名、自主避難4名。最大瞬間風速30.6m/s、累加雨量10.5mm。市内で停電が相次ぐ
平成16年	2004	篠山市地域防災計画	9月29~30日、床下浸水5戸、道路冠水、河川堤防破損等数10件発生。日積算雨量144.5mm、最大時間雨量47.5mm/h
平成16年	2004	篠山市地域防災計画	10月20日、避難勧告(今田町黒石、本荘)、自主避難者多数。住家被害:半壊(浸水による)1件、床下浸水99件。非住家被害:59件。多数道路冠水したほか、本郷地内の市道が寸断された。最大瞬間風速31.3m/s、日積算雨量197mm、最大時間雨量29.5mm/h。
平成19年	2007		5月26日、河原町で特定物件2棟が全焼。

## 2) 近年の火災発生件数と原因

篠山市の近年の火災発生件数は次表のとおりであるが、出火原因としては、焼却火の放置等や飛び火・引火・爆発等が多い。また、昭和以降の大きな火災は4件である。

### 火災発生件数の推移

	篠山市	うち車両	建物	林野	その他
平成 6 年	49	3	11	19	16
平成 7 年	35	2	11	10	12
平成 8 年	39	5	13	6	15
平成 9 年	41	7	11	6	17
平成 10 年	37	2	21	3	11
平成 11 年	30	4	12	5	9
平成 12 年	42	11	18	4	9
平成 13 年	33	4	13	8	8
平成 14 年	29	4	16	2	7
平成 15 年	26	4	11	0	11
平成 16 年	41	3	19	4	15
平成 17 年	27	3	16	2	6

資料：篠山市消防本部調べ

### 出火原因

	たき火	たばこ	火遊び	コンロ	放火 疑い含む	ストーブ	マッチ ライター	煙突	電灯等 配線	不明	その他
平成 6 年	20	6	1	-	7	2	1	-	-	9	3
平成 7 年	17	2	1	-	4	1	-	-	-	5	5
平成 8 年	10	2	1	2	2	3	1	-	-	9	9
平成 9 年	9	4	-	2	6	1	-	-	-	13	6
平成 10 年	8	3	1	5	5	-	-	-	1	8	6
平成 11 年	11	2	-	1	6	-	-	-	-	5	5
平成 12 年	14	3	-	1	5	-	1	-	2	4	12
平成 13 年	9	2	-	-	7	2	1	-	-	5	7
平成 14 年	8	-	1	-	2	1	1	-	1	4	11
平成 15 年	6	-	1	1	2	1	-	-	3	5	7
平成 16 年	8	1	2	-	5	-	2	1	-	5	17
平成 17 年	8	1	-	-	2	1	-	-	-	4	11

資料：篠山市消防本部調べ

### 3) 地震災害履歴一覧

「新編日本被害地震総覧・増補改訂版」(宇佐美龍夫 東京大学出版 1996)を基に、篠山市に震度5以上を与えたことが明確な地震及び規模・位置から篠山市に中程度以上の影響を与えたと推定される地震を記載している。

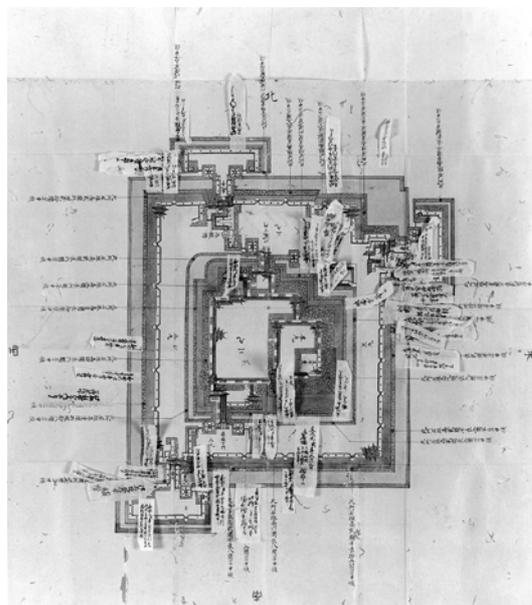
「篠山藩史料」「城絵図」「篠山町百年史」などの資料によると、一覧表の10、14、15、18の4件については、篠山における地震による被害状況の記載があるものの、嘉永7年(1854)の伊賀上野地震で篠山城の石垣が崩れたということ以外は、大きな物的被害の記録は残っていない。

番号	西暦	年代	震央(東経・北緯)	マグニチュード	地域・被害
	年 月 日	年 月 日	震災の強い地方名		
1	868. 8. 3	貞観 10. 7. 8	134.8° 34.8° 播磨・山城	7.0~	播磨諸郡の官舎、諸定額寺の堂塔ごとごとく頽倒。京都では垣屋崩れるものあり。震央は一応播磨の国府(現姫路)とするが、山崎断層の活動によるとも考えられる。
2	887. 8.26	仁和 3. 7.30	135.0°33.0° 五畿七道	8.0~8.5	京都で諸司の舎屋及び東西両京の民家の倒潰多く、圧死者多数
3	1096.12.10	嘉保 3.11.24 (永長 1)	137~138°33 3/4~34 1/4 畿内・東海道	8.0~8.5	大極殿小破、京都では震動の割に被害僅少。東大寺の巨鐘また落つ。近江の勢多橋落つ。余震多し。
4	1099. 2.22	承德 3. 1.24 (康和 1)	135~136° 32.5~33.5° 南海道・畿内	8.0~8.3	撰津天王寺廻廊倒る。土佐で田千余町(約1,000ha)みな海に沈む。
5	1361. 8. 3	正平 16. 6.24	135.0°33.0° 畿内・土佐・阿波	8 1/4~8.5	撰津四天王寺の金堂転倒し、5人圧死、山城東寺の講堂傾く。その他、諸寺諸堂に被害が多しまた津波による被害や余震多し
6	1498. 9.20	明応 7. 8.25	138.0°34.0° 東海道全般	8.2~8.4	かなり震域の広い地震があり、京都・三河・熊野で強かった。これには被害の記録は見当たらない。震害に比して津波の被害が大きく、津波は紀伊から房総の海岸を襲った。
7	1596. 9. 5 伏見桃山地震	文禄 5. 7.13 (慶長 1)	135.6°34.7° 京都及び畿内	7 1/2±1/4	京都三条より伏見に至る間の被害多く、伏見城の天守大破、石垣崩れ、上臈 73 人・中居下女 500 余人圧死。大阪・神戸でも潰家極めて多く、有馬温泉で湯屋・民家破壊、熱泉に変ず。須磨寺の本堂など崩れ、兵庫で一軒残らず崩れ出火という。全体で死者 1,500 人余。余震は翌年 4 月まで続いた。
8	1662. 6.16 大溝地震	寛文 2. 5. 1	136.0°35.2° 山城・大和・河内・和泉・撰津丹後・若狭・近江・美濃・伊勢・駿河・三河・信濃	7 1/4~7.6	比良岳付近の被害が甚大。彦根・膳所・龜山・小浜・篠山・桑名・高須・大阪・水口・伏見・高槻・岸和田・淀(山城)・尼ヶ崎などの諸城では石垣・櫓・塀・多門などにさまざまな被害あり。合計で死者 880 人余、家潰約 4,500 戸。花折断層あるいは琵琶湖西岸断層の活動に帰する説がある。
9	1707.10.28 宝永地震	宝永 4.10. 4	135.9°33.2° 五畿七道	8.4	わが国最大級の地震の1つ。家屋倒潰地域は、駿河中央部・甲斐西部・信濃・東海道・美濃・紀伊・近江・畿内・播磨・大聖寺・富山、及び中国・四国・九州に及ぶ。大阪の被害は文献によりまちまちであるが崩家 1,000 戸余、崩橋 50 余、死者 500 人余、他に溺死 1 万人余という。全体で少なくとも死者 2 万人、潰家 6 万戸、流失家屋 2 万戸。
10	1854. 7. 9 伊賀上野地震	嘉永 7. 6.15 (安政 1)	136.0°34.8° 伊賀・伊勢・大和及び隣国	7 1/4±1/4	伊賀上野・四日市・奈良・大和郡山付近で被害が大きく、木曾川・町屋川・朝明川・鈴鹿川等の土堤には裂け目ができたり、沈下したりしたところが多かった。紀伊半島沿岸では震度IV~Vと推定され、住民は津波の心配をしたという。丹後の宮津・信州の伊那・大垣・岡崎でかなりゆれ、広島で有感。信州の妻籠付近で往還損じたという。「丹波国笹山城石垣損所絵図」「嘉永七寅年日記上」によると篠山城の石垣に被害が出たと記されている。六月一五日丑ノ刻 地震にて老間余石垣崩廿一日夜式間計相崩七月御修復相成(東馬出南側石垣) 同 地震により式間計崩七月積直し(南堀北側石垣)
11	1854.12.23 安政東海地震	嘉永 7.11.4 (安政 1)	137.8°34.0° 東海・東山・南海諸道	8.4	被害地域は関東から近畿に及び有感範囲は東北から九州東北半ばに及ぶ。この地震による居宅の潰・焼失は3万軒に達すると思われるが、死者は2,000~3,000人か?
12	1854.12.24 安政南海地震	嘉永 7.11. 5 (安政 1)	135.0°33.0° 畿内・東海・東山・北陸・南海山陰・山陽道	8.4	この地震は前の地震の32時間後に起きた。そのため近畿地方及びその周辺での震害や津波の様子を古文書からはっきりと2つに区分できないものが多い。大阪では津波が木津川・安治川を逆流し、死者多数を出した。
13	1891.10.28 濃尾地震	明治 24.10.28	136.6°35.6° 愛知県・岐阜県	8.0	仙台以北を除き日本中で有感。激震地域は根尾川・揖斐川上流地方。わが国の内陸地震では最大のもの。死者 7,273 人。傷者 17,175 人、家屋全壊 142,177 戸半壊 80,324 戸。

14	1925. 5.23 北但馬地震	大正 14. 5.23	134.8°35.6° 但馬北部	6.8	震央は円山川河口、城崎付近。被害の激しかったのは円山川流域の河口から南、豊岡に至る狭い地域。篠山でも未曾有の激震で、多くの者が戸外に飛び出し商店などでは陳列品が落ちて壊れたりしたという。兵庫県資料では死者 421 人、傷者 804 人（兵庫県資料では死者 425 人、傷者 806 人）。篠山町百年史では「多くの者が戸外に飛び出し、また商店などでは陳列品が落ちて壊れたりした」とある。
15	1927. 3. 7 北丹後地震	昭和 2. 3. 7	135.2°35.5° 京都府西北部	7.3	被害は丹後半島の頸部が最も激しく、その他淡路島の北半で土塀の崩壊、家屋の小破など、淡路・福井・岡山・米子・徳島・三重・香川・大阪に及ぶ。全体で死者 2,925 人など。この地震で鄉村断層とこれに直交する山田断層を生じた。建物の倒潰率の大きいところは、この断層線に沿った地域に限られている。兵庫県資料では死者 3 人、負傷者 49 人、全壊・全焼 21 戸、半壊・半焼 2,318 戸、橋梁破損 6 ヲ所となっている。また、篠山町百年史では「篠山地方でも、びっくりして多くの者が戸外に飛び出し、中には子どもを寝かしたまま親だけ飛び出し、あわてて子どもを抱きに入ったもの、浴場では真裸のまま飛び出した女性も多く、笑えぬ悲喜劇も起こったのであった。また、余震が続いたので重要品を腰につけ、安眠することもできず、戸外に天幕を張って徹夜した者も多かった。」とある。
16	1946.12.21 南海地震	昭和 21.12.21	135.6°33.0° 南海道沖	8.0	被害は中部地方から九州にまで及んだ。全体で死者 1,330(1,362)人、(傷者 2,632 人、不明 102 人) 家屋全壊 11,591(11,506)戸、半壊 23,487(21,972) 戸、流失 1,451(2,109)戸、(浸水 33,093 戸)、焼失 2,598(2,602)戸。兵庫県資料によると兵庫県内の被害は、死者 50 人、負傷 69 人、住家の全壊・全焼 292 戸、半壊・半焼 573 戸、床上浸水 425 戸、床下浸水 361 戸、非住家の全壊 349 戸、半壊 230 戸となっている。
17	1968. 8.18	昭和 43. 8.18	135.4°35.2° 京都府中部	5.6	綾部市で住家半壊 1 戸、一部破損 1 戸、和知町周辺で落石・道路の亀裂などの小被害。
18	1995. 1.17 兵庫県南部地震	平成 7. 1.17	135.0°34.6° 兵庫県南東沿岸	7.2	平成 7 年 1 月 17 日、午前 5 時 46 分、兵庫県南部に震度 6、場所によっては震度 7 の強い地震が発生し、この地域としては、昭和 27 年に記録した震度 4 をはるかに上回る大きなものであった。人口 350 万人余が密集し、わが国の経済活動の中枢を担う淡路北部から神戸市及び阪神地域の直下で発生した内陸・都市直下型地震であった。深さ 16 km という比較的浅い部分で発生し、断層が横にずれることにより起こったもので、大きなエネルギーが一挙に開放されるタイプであった。このため、地震の継続時間が短い反面、振幅が最大 18 cm と観測史上最大の強い揺れを観測した。篠山では塀が倒れる、土壁が落ちる、屋根瓦が緩むといった被害が見られたものの、人命に関わる被害は生じなかった。



藩政日記（嘉永 7 年日記上）に残る地震の記述



丹波国笹山城石垣損所絵図（天保 8 年）

## 2.3.6 篠山市に被害を及ぼす可能性のある火災・風水害等の想定

### 1) 火災

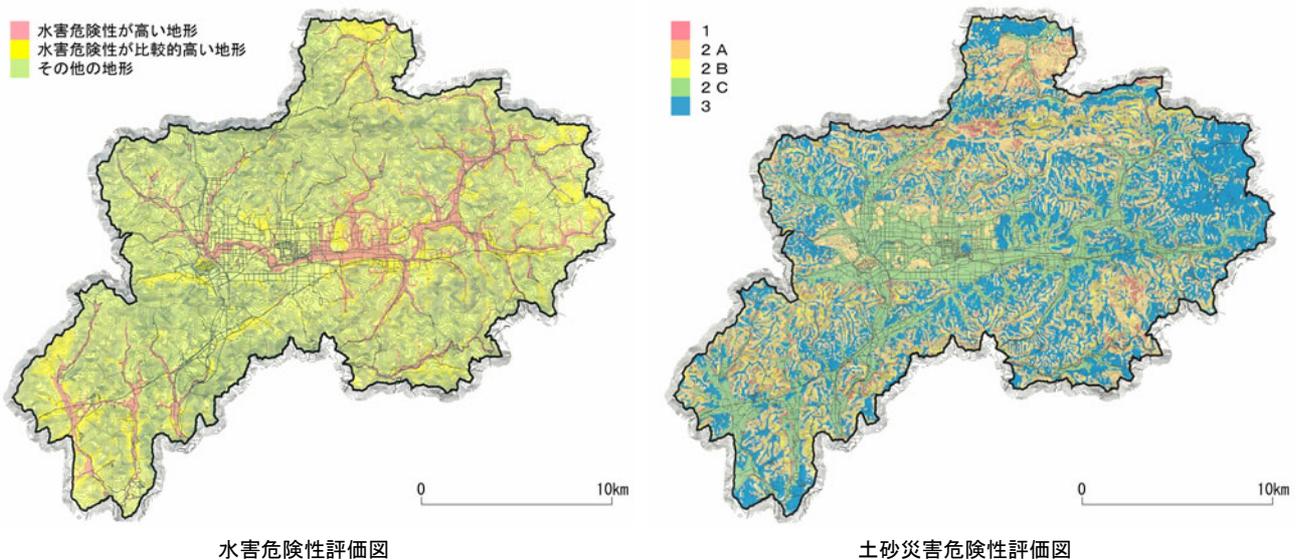
篠山市の近年における火災の件数は年平均 38.2 件程であり、そのうち建物火災は年平均 13.8 件となっている。また、林野火災も年平均 7.6 件程発生している。現在のところでは、建物火災による大きな被害はないが、旧市街地を中心に老朽木造住宅が多いことから、建築物密集地区を中心に被害を想定する必要がある。

また、林野火災についても一たん火が出ると広範囲に延焼拡大し、長時間に及ぶことから、その火災を想定し対策を立てる必要がある。

### 2) 風水害

篠山市では、明治以降台風による災害は 38 件、暴風雨や豪雨等による災害は 30 件となっている。近年では、ほ場整備、ダムの設置、河川改修、排水路等の整備の進捗に伴い、風水害による大災害は激減している。しかし、平成 8 年（1996）8 月 28 日、篠山川を境に南部地域を局地的な集中豪雨が襲い、後川地区で 260 mm の雨量を記録した。この時、山間谷間の河川の氾濫により、床上・床下浸水をはじめ、耕地の流失、埋没、冠水が起こるとともに、公共土木施設及び農業土木施設、農作物等に甚大な被害を与えた。また、一部地域では避難勧告を行うなど、集中豪雨による被害の恐ろしさを再確認させられた。

このような点からも、台風・低気圧に伴う大雨災害や、梅雨期の集中豪雨による災害を想定する必要がある。



出典：平成 14 年度篠山市土地利用調整基本計画策定事業委託業務報告書

### 3) 土砂災害

篠山市及び周辺の丹波地域は、多紀連山山地や深山山地などの急峻な山地・丘陵が多く、土砂災害発生の危険性が高い地域であるといえる。また、谷底平野の周辺にも土石流危険渓流や崩壊土砂流出危険地区、急傾斜地崩壊危険箇所及び危険区域、山腹崩壊危険地区などの指定がみられる。

台風・低気圧に伴う大雨や梅雨期の集中豪雨により、土砂災害の危険性は高まる。そのため、梅雨期や台風期には浸水とともに、土砂災害を想定する必要がある。

## 2.3.7 篠山市に被害を及ぼす可能性のある地震の想定

### 1) 想定地震

ここに示す想定地震は、篠山市周辺における過去の被害地震と地震源となりうる活断層の位置、あるいは兵庫県及び関係機関などの見解・意見を参考に総合的に検討したものである。

#### 六甲断層系（マグニチュード 7.0）

六甲断層系は、六甲山地の南側に東北東－西南西の線に沿って数多くの活断層が密集して分布している断層帯で、代表的な活断層として野島断層、六甲断層、諏訪山断層、五助橋断層等がある。中でも野島断層は、兵庫県南部地震の起震断層として知られている。その位置、長さから篠山市に震度6以上の地震を引き起こしうる活断層は、五助橋断層及び十万辻断層（共に活断層であることが確実）であり、マグニチュード 7.0 の地震動が想定される。

#### 有馬－高槻構造線系（マグニチュード 7.0）

有馬－高槻構造線は、京都府八幡山から池田、宝塚付近を通り、有馬温泉に至るほぼ東西の線に沿った総延長 44 km の大規模活断層である。この中で、その位置、長さから篠山市に震度6以上の地震を引き起こしうる活断層は、有野－淡河断層及び十万辻断層（共に活断層であることが確実）であり、マグニチュード 7.0 の地震動が想定される。

#### 山崎断層系（マグニチュード 7.2）

山崎断層は、北西－南東の線に沿った総延長 87 km の大規模活断層であり、その断層上では過去にいくつかの地震が発生し、今後とも活動の可能性があると予測されている。この中で、その位置、長さから篠山市に震度6以上の地震を引き起こしうる活断層は、三木断層（活断層であると推定される）であり、マグニチュード 7.2 の地震動が想定される。

#### 花折断層系（マグニチュード 7.7）

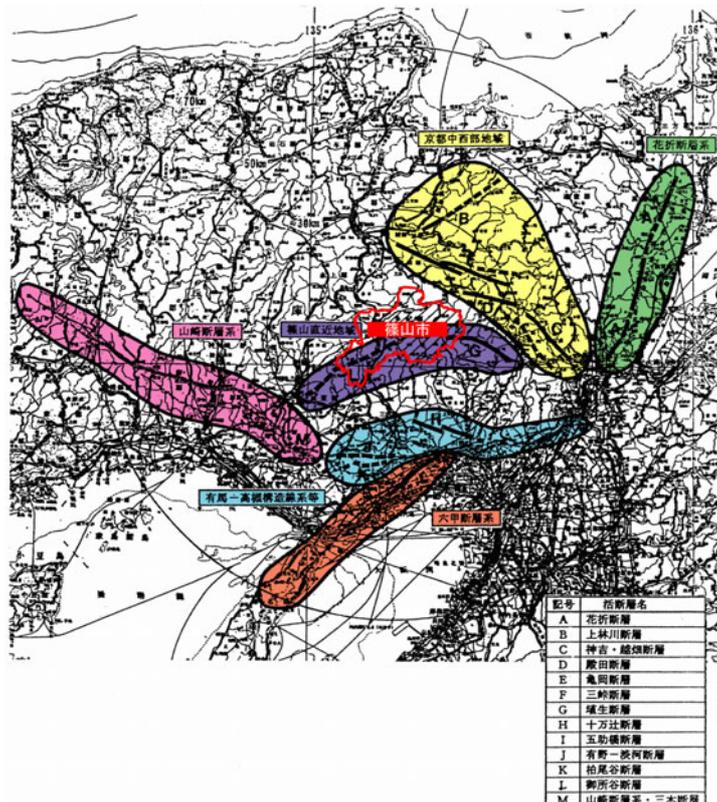
花折断層は、安曇川の直線谷をつくる総延長 50 km 以上に達する大規模活断層である。花折峠以北は活動度が低いが、花折峠以南は活動度も高く、京都盆地に入るあたりから数本に分岐する。活断層であることが確実な花折峠以南の活断層は、その位置、長さからマグニチュード 7.7 と大規模な地震動が想定され、篠山市に震度6以上の地震を引き起こしうる。

#### 京都中西部地域（マグニチュード 6.9～7.4）

篠山市の東部及び北部の京都中西部地域には、活断層がいくつか分布し、その断層上には過去に地震もいくつか発生している。その中で活断層であることが確実で、篠山市に震度6以上の地震を引き起こしうるものは神吉・越畑断層、殿田断層、三峠断層であり、それぞれマグニチュード 6.9、6.9、7.4 の地震動が想定される。

#### 篠山直近地域（マグニチュード 7.1）

篠山市には東部と西部に活断層がみられる。西部の御所谷断層は活断層であると推定されるものであるが、東部の埴生断層は活断層であることが確実である。埴生断層はマグニチュード 7.1 の地震動が想定される。



篠山市に被害を及ぼす地震（震度6以上）を引き起こしうる活断層位置図

## 2) 地震被害の想定

篠山市の自然条件、社会条件等の地域特性と兵庫県南部地震における被害特性を踏まえた上で、地震災害による被害の様相を定性的に想定する。なお、地震時の条件としては、兵庫県南部地震と同様に冬の明け方であり、マグニチュード 7.0 を上回る地震が篠山市の直下で発生した場合とする。

### ①地震動

マグニチュード 7.0 を上回る地震では、旧市街地や旧集落などが集積している地盤条件がやや良好な丘陵地や段丘でも、震度 6 を引き起こす。軟弱地盤の谷底平野や人工改変地（盛土地・埋立地）では、震度 7 の強い地震動に見舞われる。とくに篠山川や曾地川、靱井川など各河川流域の低地の市街地・集落では注意が必要となる。

### ②地盤液状化現象

地盤液状化現象とは、地震時に地盤が緩み液状化することであり、地下埋設物（上水道、下水道、地下タンク等）や道路・橋梁、建築物などに被害をもたらす。

地盤液状化現象の発生しやすい条件は、緩い地盤固結度と高い地下水位とからなる土地である。とくに地盤液状化の発生する可能性が高いのは、人工改変地（盛土地、埋立地）である。次に可能性があるのは、谷底平野や扇状地で、中心市街地周辺部や河川流域の低地の市街地・集落では注意が必要となる。

### ③建築物等の被害

地震動による建築物被害は、一般に木造建築に多く、SRC（鉄骨鉄筋コンクリート）構造、RC（鉄筋コンクリート）構造、S（鉄骨）構造などの非木造建築物に少ない。古い木造建築物の密集する中心市街地や各集落では、震度 7 程度の地震が発生した場合、30%～40%程度の建築物が倒壊することが予想され、倒壊建築物の下敷きなどによる人的被害や出火による延焼拡大に対し、十分な注意が必要となる。

### ④土砂くずれの被害

市内の土砂災害等危険箇所及び区域は 570 箇所以上ある。

土砂崩れの危険性は、単体の建築物や人的被害のみにとどまらず、広範囲の区域にその被害が及ぶ可能性がある。とくに、道路沿いに土砂災害の危険性の高い箇所が存在していることから、崩壊土砂により道路が閉鎖し、集落が孤立化する恐れがある。また、篠山地区では市街地内の丘陵地に急傾斜地崩壊危険箇所及び区域がみられ、とくに注意する必要がある。

### ⑤ライフラインの被害

住民の生活や市の活動の維持に電気、ガス、上水道、下水道などのライフラインは不可欠であるが、上下水道網の幹線的なラインは篠山地区の市街地中心に敷設されているため、地盤条件はおおむねやや良い区域となっている。しかし、池上や糯ヶ坪、京町などでは地盤条件が悪く、また、地盤条件の異なる境界線付近でのライン破壊の可能性もある。

### ⑥公共施設の被害

公共施設の破壊は、災害応急対策の中核機能の麻痺や公共サービス機能の障害をもたらす。

とくに、軟弱地盤上の建築年代の古い老朽化した施設においては、建築物の被害が想定される。

### ⑦道路・橋梁等の被害

篠山市は、河川に沿って道路網が整備されており、主要な幹線道路は橋梁を通過しているため、橋梁が被害を受けた場合、バス交通など道路機能に障害が発生する可能性がある。

また、旧市街地においては、建築物の密集した狭小幅員道路が大部分を占めるため、建築物の倒壊による道路の閉鎖の可能性があり、災害応急対策活動に支障をきたす。

### ⑧護岸の被害

河川の流域は軟弱地盤であり、地盤振動や地盤液状化による護岸の破壊が想定され、河川やため池施設の堤防が決壊した場合、出水、浸水被害が及ぶ危険性がある。

### ⑨人的被害

地震による人的被害は、先に示した様々な被害が相互に関係し合っ生じるものであるが、建築物等の被害状況に応じてその危険性は相対的に高くなる。とくに、老朽木造建築物の割合が高い中心市街地・各集落においては、人的被害が大きくなる危険性が高い。

### ⑩地震火災

地震災害における出火は、建築物の倒壊状況に応じてその危険性が相対的に高くなる。

とくに、木造建築物が密集している篠山地区などの中心市街地においては、地区建ぺい率が高く、耐火率も低いため、延焼火災の危険性が高い。

### 3) 兵庫県の被害想定結果

兵庫県が県内において大きな影響があると予想される地震による被害を想定したもののうち、本市に該当するものは、下記のとおりである。

ただし、全体の被害想定結果及び震度分布図は、兵庫県の運営するホームページ「フェニックス防災情報 (<http://web.bosai.pref.hyogo.jp/>) に掲載されている。

なお、この被害想定結果に基づく数値は、あくまでもシミュレーションによって想定される数値であって、地震の規模、気象条件等によって予想を大きく上回ることも想定しておかなければならない。

被害想定条件としては、

風速： 3.0m/s  
地震発生時期： 季節：冬、春秋、夏  
時刻： 下表のとおり

時刻	設定時刻における状況
3-4時	ほとんどの住民が自宅で就寝している。建物倒壊による被害が最大となる。
8-9時	朝の通勤時間帯。鉄道事故の被害が最大となる
10-11時	午前中のオフィスアワー
12-13時	昼食時。一時的に屋内人口と出火率が増加する。
16-17時	屋外人口が最大時。道路災害、ブロック塀等倒壊、落下物による被害が最大となる。
18-19時	夕食時。出火率が最大となる。

#### ①有馬-高槻断層帯～六甲・淡路島断層帯地震

想定条件：マグニチュード 7.7

想定結果：

季節	時間帯	最大震度	建物全半壊数 (棟) [率]	炎上出火数 (件)	死者数 (人)	負傷者数 (人)	避難者数 (人)
冬 春秋 夏	3-4時	6強	232[1%]	1	0	36	305
	8-9時	6強	232[1%]	1	0	31	305
	10-11時	6強	232[1%]	1	0	28	305
	12-13時	6強	232[1%]	1	0	30	305
	16-17時	6強	232[1%]	1	0	28	305
	18-19時	6強	232[1%]	1	0	31	305

#### ②山崎断層地震

想定条件：マグニチュード 7.7

想定結果：

季節	時間帯	最大震度	建物全半壊数 (棟) [率]	炎上出火数 (件)	死者数 (人)	負傷者数 (人)	避難者数 (人)
冬 春秋 夏	3-4時	6弱	3[0%]	0	0	1	4
	8-9時	6弱	3[0%]	0	0	4	4
	10-11時	6弱	3[0%]	0	0	2	4
	12-13時	6弱	3[0%]	0	0	1	4
	16-17時	6弱	3[0%]	0	0	2	4
	18-19時	6弱	3[0%]	0	0	3	4

#### ③南海地震

想定条件：マグニチュード 8.4

想定結果：

季節	時間帯	最大震度	建物全半壊数 (棟) [率]	炎上出火数 (件)	死者数 (人)	負傷者数 (人)	避難者数 (人)
冬 春秋 夏	3-4時	5強	1[0%]	0	0	1	1
	8-9時	5強	1[0%]	0	0	1	1
	10-11時	5強	1[0%]	0	0	1	1
	12-13時	5強	1[0%]	0	0	1	1
	16-17時	5強	1[0%]	0	0	1	1
	18-19時	5強	1[0%]	0	0	1	1

④花折断層地震

想定条件：マグニチュード 7.8

想定結果：

季節	時間帯	最大震度	建物全半壊数 (棟) [率]	炎上出火数 (件)	死者数 (人)	負傷者数 (人)	避難者数 (人)
冬 春秋 夏	3-4時	6弱	0[0%]	0	0	0	0
	8-9時	6弱	0[0%]	0	0	0	0
	10-11時	6弱	0[0%]	0	0	0	0
	12-13時	6弱	0[0%]	0	0	0	0
	16-17時	6弱	0[0%]	0	0	0	0
	18-19時	6弱	0[0%]	0	0	0	0

⑤三峠断層地震

想定条件：マグニチュード 7.0

想定結果：

季節	時間帯	最大震度	建物全半壊数 (棟) [率]	炎上出火数 (件)	死者数 (人)	負傷者数 (人)	避難者数 (人)
冬 春秋 夏	3-4時	6弱	93[0%]	1	0	11	130
	8-9時	6弱	93[0%]	1	0	11	130
	10-11時	6弱	93[0%]	1	0	9	130
	12-13時	6弱	93[0%]	1	0	9	130
	16-17時	6弱	93[0%]	1	0	9	130
	18-19時	6弱	93[0%]	1	0	11	130

⑥京都西山断層地震

想定条件：マグニチュード 7.3

想定結果：

季節	時間帯	最大震度	建物全半壊数 (棟) [率]	炎上出火数 (件)	死者数 (人)	負傷者数 (人)	避難者数 (人)
冬 春秋 夏	3-4時	6弱	60[0%]	1	0	7	90
	8-9時	6弱	60[0%]	1	0	7	90
	10-11時	6弱	60[0%]	1	0	5	90
	12-13時	6弱	60[0%]	1	0	6	90
	16-17時	6弱	60[0%]	1	0	6	90
	18-19時	6弱	60[0%]	1	0	8	90

※想定結果表中における建物全半壊率は、市内の被害棟数と県内全体の棟数とを比較した数値となっている

